共立女子大學
文藝學部報

文芸学部報 第一一七号
編集責任者 村上隆
二〇一二年十一月一日
共立女子大学 文芸学部発行
東京都千代田区
一ツ橋二-二-一

日食騒動記

堀　新

今年五月二十一日（月）は金環日食だった。六月四日（月）は部分月食だったし、今年は天体ショーの当たり年らしい。太陽や月を見つめて、「見えた！」と歓声をあげた学生も多かっただろう。

かく言う私は、六月四日の月食は研究会があったので、最初から見るのを諦めていた。そして金環日食の時も、天気予報は曇りだし、どうせ金環のリングは見えないだろうと高をくくっていた。あまりワクワクしなかったのは、子どもの頃からの理科嫌いのせいかも知れない。

ところが五月二十一日の朝起きてみると、曇り空に薄日が差しているではないか。とりあえず玄関から出てみると、朝の忙しい時間帯なのに、結構たくさんのご近所さんが空を見上げている。せっかくだから自分もと思ったものの、今日は曇りと決めつけていたので専用グラスを買っていない。仕方がない、良い子の皆さんには決して真似をしないでもらいたいが、サングラスをして黒ビニールのゴミ袋を何重にも重ねると、何とか日食のリングが見えた。

あとでテレビを見ると、とても綺麗な映像が流れている。自分が見たのとはえらい違いだなぁと思いつつ、金環日食という一大イベントに自分も参加できて、何だかホッとする。

日食そのものよりも興味深かったのは、世界各地での反応だ。二〇〇九年（平成二十一）七月二十二日の皆既日食のさい、インドのガンジス川では多くの人々が何やらお祈りしている。インタビューでは「太陽の神様がいなくなるようで恐ろしい」と答えていた。ヒンズー教の神話のなかで日食は、悪魔が太陽を飲み込む物語として語られているらしい。古今東西、人間には太陽信仰があるから、雲もないのに太陽が一瞬にして消え、気温も急速に低下する。突然襲いかかってきたこの怪異現象を、人知を越えた出来事として恐れるのは、ある意味で当然だろう。

しかし、インドのお隣のブータンでは、日食は良いことの前兆として、楽器を鳴らしながら感謝するらしい。あるテレビ番組では、これをあたかも仏教の影響のように伝えていたが、本当だろうか？　日本でも仏教の影響力が強かった古代から、現在と同じように日食を歓迎していたのだろうか？　理科には興味がないが、日本史は専門なので、ちょっと調べてみた。

古代の日食として有名なのは、寿永二年（一一八三）閏十月一日、木曽義仲の部将と平重衡が戦った備中国水島の合戦のものだろう。この時の様子が、『源平盛衰記』巻三十三に記されている。「天俄に曇て、日の光も見えず、闇の夜の如くに成たれば、源氏の軍兵共日蝕とは不知、いとゞ東西を失て舟を退て、いづち共なく風に随つて遁行。平氏の兵共は兼て知にければ、いよく時を遁り、重て攻戦」。

つまり、突然、闇夜のように真っ暗になったので、源氏軍はこれが日食とは知らず、慌てふためいて退却した。平氏軍はこの日に日食があることを知っていたので（慌てず）、源氏軍を追撃したというのである。この水島の合戦の勝利により、平氏は都落ち以来の敗勢を挽回し、摂津国福原まで進撃する。そして源義経率いる源氏の軍と一ノ谷で戦って再び敗れ、壇ノ浦で滅びることになる。

『源平盛衰記』によれば、水島の合戦の勝敗を分けたのが、日食だった。平氏がこの日の日食を知っていたのは、平氏政権として朝廷を掌握したさい、陰陽寮の暦作成にも何らかの関わりを持っていて、日食の知識を持っていたからだろう。

これに対して、木曽義仲の源氏軍はこの年七月に入京したばかりで、暦の知識がなかったのだろう。ヒンズー教徒たちと同様に、日食を恐ろしい出来事として怯えたのである。

こうしてみると、暦の作成や科学的知識の有無が、日食を恐れて逃げ出した源氏軍と、平然として源氏軍を追撃した平氏軍の違いとなったようだ。ただし、このエピソードは『源平盛衰記』にしか載っていないことが気にかかる。『源平盛衰記』は『平家物語』の異本とされるが、他の『平家物語』諸本には、このエピソードは載っていないようだ。そして九条兼実『玉葉』や吉田経房『吉記』など、当時の公家の日記にもない（この頃、日記をつけていたのは公家だけである）。そうすると、このエピソードをどこまで信用して良いのか、ちょっと気になってくる。

タイムマシーンに乗って源平合戦の時代に行けるわけでもないから、他の事柄からアプローチしてみよう。そこで思い当たるのが、朝廷での「御所つつみ」の風習である。これはあまり知られていないが、日食や月食のさいに、御所を筵（むしろ）で覆い、屋内では帳障（絹製の垂れ幕のようなもの）を引き、その内側に天皇が籠もるという習慣があった。これは日食や月食の妖しい光が、天皇の身体にあたるのを避けるためであった。日食を恐ろしい怪異現象とみなしていたからこその風習だろう。

この風習は、鎌倉時代の建保元年（一二一三）に成立した、『源平盛衰記』のエピソードは、当時一般的だった日食を恐れる気持ちを水島の合戦の勝因にあてはめた（つまり創作した）可能性が高い。そしてさらに、科学的知識のある貴族的な平氏、田舎育ちの無知で野蛮な源氏という図式を適用したのだろう。

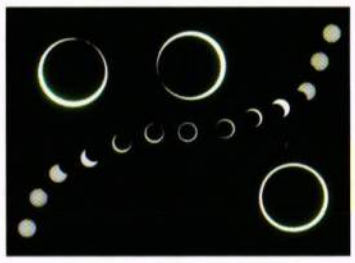
ついでに、今度は確かな日食のエピソードを一つ。天正十年（一五八二）六月二日、織田信長が明智光秀の謀叛によって自害した本能寺の変は有名である。その前日、信長が公家たちとの雑談のなかで暦の変更（十二月に閏月を新設）を話題にし、公家たちは「無理なこと」と反発した（『晴豊公記』）。

暦など時間に関することは天皇大権の一つであり、これを侵犯しようとする信長の言動が、本能寺の変の原因とする説がある。本能寺の変は日本史上の最大の謎とされ、研究者・作家・歴史愛好家も含めて、さまざまな説が出されている。なかでも朝廷黒幕説、天皇と信長が政治的に対立していたとする説には根強いファンが存在する。

しかし、六月一日に日食があり、朝廷はこれを予測していなかった。そのため御所つつみの準備もなく、天皇は日食の妖しい光に当たってしまった。暦を作成した陰陽寮の大ポカである。信長の暦変更発言は、このような状況下のものだった。つまり、天皇大権の侵犯なんてとんでもない、天皇の身体を守ろうというのが、信長の真意だったのである。

理科嫌いの私が、長々と日食の話を書き連ねてみた。細かい話はいいから、このことだけは忘れないで欲しい。日食の有無によって、歴史は変わらないけれども、歴史の解釈はこんなに変わることを。

（ほり　しん　教授・日本中世・近世史）



金環日食（天田徹氏撮影）

美の旅

中本　恭平

We wandered happily back to town through the dusk, the flame of the maples muted in the dying light. (Sterling North, Rascal. Puffin Books, p. 144)

写真で見る夕焼けと、読んで想像する夕焼け。みなさんはどちらがより美しいと感じますか。

写真は筆者の自宅近くで撮影した富士山です。

（なかもと　きょうへい　教授・英語学）

水島の戦い　小松茂美編『平家物語絵巻』8（中央公論社、1991年）より

軟障「年中行事絵巻」（福山敏男編『新修日本絵巻物全集』24、角川書店、1978年）より

学部報に関する
ご意見・ご感想を
お寄せ下さい。
E-mail:
gakubuho@
kyoritsu-wu.ac.jp

大学随想

旅と映画とせつなさと

深津　謙一郎

考えてみると、三十歳を過ぎるころから、映画館に足を運ぶ機会がめっきり減った。学生時代は、都内のあちこちに名画座があって、『ぴあ』を片手に映画館めぐりをしたことを思い出す。毎週一～二回は映画館へ行き、二本立てや三本立てを観ていたから、年間で一五〇～二〇〇本は映画を観ていた計算になる（レンタルのDVD鑑賞が中心の現在はその五分の一程度だろうか）。当時はもう、レンタルビデオ店もそれなりに充実していたけれど、小津もゴダールもタルコフスキーも、名作といわれる映画はたいていの名画座のスクリーンで観た気がする。

――とこう書くと、昔はかなりマニアックな映画青年だったのでは、と思われるかもしれないが、その当時の文学部の学生としては、これで平均的だったのではないだろうか。ヴィスコンティがどうだとか、ウディ・アレンはあだとか、喫茶店や居酒屋で、友人たちとそんな〝背伸び〟した議論を交わすのが楽しかった。

ところで先ほど、映画館にあまり足を運ばなくなったと書いたが、旅に出たときはべつである。とくに（前号にも書いた）ひとり旅の場合、夕食時に食堂や居酒屋のテーブルをひとりで占領するのは気が引けるので、旅先での夕食は、開店早々のまだすいている時間帯に済ませることになる。ひとりでは長居もできないから、店を出てもまだ午後七時前……。映画館に立ち寄るのは、「こんな時間から、ホテルの部屋でテレビを見ないでいいのである。なぜだか分からないけれど、そうすると、旅に出ているのだという気分にどっぷり浸れる。

そういえば、村上春樹があるエッセイの中で、「知らない街の知らない映画館に入って映画を見ていると、映画が妙に体にしみてくる。これはたぶん映画の楽しさが本質的にせつなさと背中あわせになっているからではないかという気がする」と書いていた（『村上朝日堂』）。考えてみれば、旅の楽しさというのも、どこかせつない部分があって（じっさいに現地へ行くよりも、計画しているときのほうが楽しい、というのもせつなさのひとつですね）、そんなところがどこかで映画と響きあうのかもしれない。

ちなみに、旅先の映画館には〝一期一会〟などころがあって、同じ映画館を二度訪れることはほとんどない。例外は那覇の「桜坂劇場」で、ここは前身の「桜坂琉映」時代からかれこれ十年以上通っている。現在はだいぶ〝おしゃれ〟になって、（地方ではなかなか観ることのできない）インディーズ系作品も上映されたりするのだけれど、劇場周辺はほんとうに〝うらぶれた〟色町で、旅と映画のせつなさを実感するにはとてもよい場所です。

（ふかつ　けんいちろう　准教授・日本近代文学）

プロフィール大特集

4面でお届けしている「プロフィール」コーナー。
今号では場所を移し、大特集してみました。

文芸教養研究室
國分（こくぶ） 建志（けんじ） 先生
（准教授）

野良猫愛好家としても有名？な國分先生は一昨年度に文芸学部の一員となられました。

ご専門は中国語学。今年度は「基礎中国語」「文芸学演習Ⅱ B」「卒業論文ゼミナール」をご担当になっています。

「文芸学演習Ⅱ B」では『三国志』をテキストとして使用中。お気に入りの登場人物を伺うと賈詡（かく）を挙げて下さいました。彼は乱世の中、様々な主君の下を渡り歩き、最終的に曹操（そうそう）とその息子・曹丕（そうひ）に仕えることになる軍師（参謀）。相手の心理を読んだ駆け引きに長け、彼の策には一つとして外れがなかったとのこと。曹操が大敗を喫した赤壁（せきへき）の戦いでも、賈詡は曹操の出兵に反対していたそうです。また、合わない主君の下は自ら去るという、ある種独立心に満ちたところや、有力者らとの私的な交際を持たず、ひっそりと暮らしていたところなどにも惹かれるそうです。「自分にないものばかり持っているんだよね」と笑いながら話す先生。独立心を持っているという点では野良猫とも通じる部分があるのかも。

とある墓場にて

さて、そんな國分先生に中国語とのご縁について伺ってみました。（原）

＊＊＊

学生の頃から中国語を学んできた私がよく聞かれる質問に「なぜ中国語を勉強しているんですか？」というものがあります。

ほかにも「中国語はペラペラでしょう？」「中国が大好きなんでしょう？」「中国のことなら何でも知っているんでしょう？」「奥さんは中国人でしょう？」。果ては（私の顔を見て）「先生って中国人？」まで色々なことを聞かれます。

せっかくの機会なので、この場を借りてまず二つ目以下の質問から答えると、私はけっして中国語がペラペラじゃないし、中国だけが特別好きというわけでもありません。中国についても知らないことだらけだし、奥さんは関西人だし、本人ももちろん日本人です。もっとも四月の最初の授業では中国人の振りをして新入生をちょっとオドかしていますが（騙された皆さん、ごめんなさい）。

そこで最初の「なぜ中国語を勉強しているのか」に戻ると、そもそものきっかけは、学生のころ片思いをしていた先輩の中国語の発音がとてもきれいで、それに憧れて自然と勉強にも力が入った、というきわめて不純な動機です。なおこの片思いは実りませんでした。しかし中国語そのものの響きにも惹きつけられていた私は、結局この道へ進むことになったのです。

ところで当時の私は漠然と、「好きな人が現れるような分野なら、そちらへ進めば恋愛に限らず、ほかにもよい人の縁に恵まれるのではないだろうか」と考えていました。今振り返ると、この見通しはそんなに外れていなかったような気がします。

実は私は中国語を始めてからもまったく中国へ行きませんでした。初めて中国＝海外へ行ったのは本学の助手となり、中国研修の引率補助に入った時で、中国語を始めてから、もう八年余りも経っていました。

これには理由があり、学生時代、私の友人はみな行動的で、夏休みになるや、やれ中国だ、やれシベリア鉄道でユーラシア大陸横断だと、どんどん海外に飛び出していきました。そして彼らに出遅れてしまった私は、今さら後追いするのもくやしいので、「よし、それなら自分は日本から一歩も出ずに中国語を学んでやろう！」と変な方向に意地になってしまったのです。

しかし今となっては、激しく変化し続ける中国のその時々の姿をこの目に焼き付けておけばよかったかなと、いささか残念な気もしています。

さて、私は「中国語がうまくなること」より「中国語がうまくなるためにはどうすればよいか」を考えることに、より強い関心を持っています。中国語教授法、というよりむしろ学習法です。常に学習者の目線で上達法を考え続けたい。そのためには語学力がいつまでも未熟であり続けなければなりません（？）。というわけで私の語学レベルはいつまでたっても上がらないのです（屁理屈です）。

フランス語フランス文学研究室
田口（たぐち） 亜紀（あき） 先生
（専任講師）

背筋を伸ばして颯爽と歩く姿がまるでパリジェンヌのような田口先生。本年度より文芸学部に専任講師として着任された先生ですが、八年前から非常勤で共立の授業を担当なさっています。

ご専門はフランス文学で、ご担当科目は「仏文学演習Ⅱ」「基礎・文芸ゼミナール」「仏文学講読B」「フランス文学各論B」「基礎フランス語」「卒業論文ゼミナール」です。

先生はフランスのパリに四年間、スイスのジュネーヴに二年間留学されていたとのこと。そんな田口先生にご専門や留学体験などについて伺ってみました。（渋谷）

＊＊＊

留学したのはフランス語圏のフランスとスイスですが、そこで話されているフランス語は少し違っています。スイスではゆっくりと発音しますし、ジュネーヴの隣の都市であるローザンヌでは、歌うように、なめらかに話します。また、フランスでも地方によって発音がさまざまです。異なる出身の人たちが集まるパリでは、話している人のアクセントで、その人の出身を言い当てることが好きでした。留学中には標準的なフランス語だけでなく、様々な「訛り」も耳にして、多様な世界があることを肌で感じました。

もともとフランス文学の一九世紀ロマン派を専門にしていましたが、フランスだけではない「フランス語圏」に興味を持ち、アフリカやカリブ海のフランス語圏文学や旅行記を読み始めました。

留学の目的は、論文を書くことでしたが、完成まで時間がかかりました。その理由をひとつ挙げるとすれば、筋道を立てて文章を積み重ね、論を展開していく訓練を、日本で十分に受けてこなかったことですね。

ではフランス人は、というと、小さい時からその訓練を受けています。大学入試では理系・文系とも、哲学の論文試験を受けなければなりません。感覚的なことも言語化する傾向があり、お国自慢のワインの繊細な味を、的確な言葉で表現します。

また、フランス語構文の特性として、あいまいな文は成り立ちません。つまり、フランス語は論理的思考を強いる言語なのです。フランス語を修得すると、母語である日本語に跳ね返ってきて、日本語でも明晰に表現しないと済まなくなります。私はフランス語を修得して、理屈っぽくなったようです！　自分の中に複数の「私」がいて、いつも議論をしているようなのです。

チュニジア料理店にて

言語はその国・地域の歴史や精神性を映し出すものですが、その多様な文化や価値を知ることは、自分をよりよく知ることに繋がります。私は何者なのか、と問い続けることでもあります。

留学中には何かにつけて旅をしました。ベルギーのナミュールにある資料センターで研究資料を収集した時のことです。日中は資料を読み、夕方には河岸を散歩したり、教会でコンサートを聴いたり、人で賑わうお店で何十種類とあるベルギービールを試飲したりしました。

また、モロッコでの家族旅行も懐かしく思い出されます。モロッコは、日本からは遠いのですが、フランス人にとっては身近な観光地です。サハラ砂漠を四輪駆動で走りながら、らくだに乗って移動する遊牧民の暮らしを想像しました。

日本人であることをやめるわけではないのですが、フランス人、スイス人、ベルギー人、あるいはモロッコ人になれる（なったつもりになる）旅は人生の糧です。そして、実際の旅と同じくらい旅行記を読むことが好きです。先人が書いた旅行記には、その土地に対する観察や認識のうちに時代性が読み取れます。また、同じ場所を訪れても、人によって印象が違い、作者の個性が表れます。

博士論文で取り上げたネルヴァルの旅行記は、一九世紀のフランス人作家が行った旅の忠実な記録でありながら、幻想的で、とても不思議な作品です。邦訳（『東方紀行』）がありますので、ぜひ読んでみてください。

研究紹介

岩﨑　えり奈
「世帯調査からみたシーディー・オクバ村」長谷部史彦編『ナイル・デルタの環境と文明―ブヘイラ地方をめぐる学際的地域研究』早稲田大学イスラーム地域研究機構　二〇一二年三月

奥　彩子
「記憶の変奏―ユーゴスラヴィア解体と文学的ディアスポラ」『叢書ユーラシア世界第二巻　ディアスポラ』東京大学出版会　二〇一二年七月

須田　基揮
『新羅万象　1108II』第二四回現代美術展　今治市河野美術館　二〇一二年二月～三月

田口　亜紀
『フランス・ジャポン』の日本人執筆者」『満鉄と日仏文化交流誌「フランス・ジャポン」』ゆまに書房　二〇一二年九月

堀　新
「織田信長の桐紋拝領と『信長公記』」金子拓編『「信長記」と信長・秀吉の時代』勉誠出版　二〇一二年六月

武藤　剛史
（翻訳）ミシェル・アンリ著『キリストの言葉 - いのちの現象学』白水社　二〇一二年六月

今昔物語 ―きのう・今日・あした―

いけばな550年

林　美佐

『碧山日録』（一四六二年）という東福寺の禅僧の日記に、池坊専慶の活躍が書き留められてから今年で五五〇年。その記念の花展が五月三十一日から六日間、東京で開かれた。展示された多くの作品と資料は、いけばなの黎明期から現代まで、池坊の長い歴史を語っていた。中でも、豊臣秀吉を迎える前田利家邸のために池坊専好（初代）がいけた大砂物の復元は素晴らしかった。松の枝に掛け軸の猿が遊んでいるように見える伝説のいけばなである。松や檜の持つ圧倒的な力は人を魅了する。花の「いのち」を生けるのが池坊であるとおっしゃった先生の言葉が心に蘇った。

今から三〇年以上前のことになるが、華道部池坊に入って、初めて花を生けた時、私は混乱した。いわゆる花よりも緑の枝、木の方が主役らしい。花の生け方にもルールがあり、花材には表・裏があるという。しかも、花（枝・草・葉）には決して同じものはない。一本一本、全部表情が異なる。難しいと思った。

池坊には立花（りっか）・生花（しょうか）・自由花（じゆうか）という三つのスタイルがある。伝統を守りながらも、時代にあわせて、新しいものを貪欲に取り込んできたので、池坊は広く深い。普段の稽古は自由花が多かったが、四年の合宿では立花を学ぶことができた。振り返ってみると、共立祭でのミニ花展と夏の合宿に、クラブ活動ならではの良さがあったと思う。

京都の六角堂には、聖徳太子が沐浴したという池があり、その池のほとりに住坊があったので「池坊」と呼ばれるようになり、いけばなの源は僧侶による仏前への供花であった。やがて、池坊は花の名手を輩出し、室町時代後半に池坊専応が華道の理念を確立したことによって、花を生ける行為は華道へ昇華した。だから、池坊には「流」も「派」もつかず、「華道家元池坊」という。合宿で初めて聞いた池坊の由来はズシリと胸に響いた。

合宿の良さは講義だけではない。八王子一期生の私たちは、最終のスクールバスを気にしながらの稽古が多く、落ち着かなかったが、合宿では、時間をかけて、生花の勉強ができた。また、自由花の花材を好きなように選ぶこともできて楽しかった。リアトリスやグラジオラスを贅沢に使った写真を見ると、欲張りな自分が恥ずかしい。

昭和55年合宿　ノートと写真

卒業後も師に恵まれ、一生「お華」を続けられると思っていたが、昨年の震災は思わぬ形で私の生活に打撃を与え、やむなく今は華道から離れている。しかし、人生は長い。いつかまた時機を得て、池坊に戻る日が必ず来ると信じている。

幾多の天災、政変、戦争にもじっと耐え、先人たちが今日まで伝えてきた歴史の重みを感じて、特に若い皆さんに、華道に限らず、日本の文化に目を向けていただけたら、望外の喜びである。

（はやし　みさ　昭和五十七年度　文芸学部　仏文学コース卒業／平成七年度　大学院文芸学研究科　演劇学専攻修了）

英語英米文学研究室

浦野（うらの）　郁（かおる）　先生

（専任講師）

柔らかな雰囲気の浦野先生。共立へいらして二年目ながら、既に多くの学生に慕われています。イギリス小説、中でも特に大学三年の時に出会われた作家E. M. Forsterがご専門です。本学部では「基礎・文芸ゼミナール」「英米文学各論A」「英米文学演習Ⅰ・Ⅱ」「卒業論文ゼミナール」をご担当になっています。

先生は、二〇〇四年の夏より約四年間、イギリス北部のダラム大学に留学されていました。ダラムは、世界遺産にも指定されている大聖堂とお城の周りを川が流れる、緑豊かで歴史のある土地だそうです。留学中に地元産のYorkshire Teaという紅茶を気に入られ、今でも手離せないのだとか。この紅茶は、渋みがなく、ミルクティーにピッタリとのこと。興味を持たれた方はぜひお試しください。

さて、この度は先生に留学時代の思い出を中心にお話を伺いました。（細沢）

＊＊＊

イギリスでは約四年間を過ごし、博士論文を執筆しました。あちらの論文指導は常に指導教官と一対一で行われるため、友人同士のような、対等で親しい間柄になることが出来ます。指導教官とは親子ほどに年齢差があり、また、著名な研究者として活躍する彼女は大変多忙であったと思いますが、"Pat"、"Kaoru"とファーストネームで呼び合い、時にはお互いの家を訪ねるなど、随分仲良くしていただきました。毎回面談の最初には学生をリラックスさせようと、「コーヒーか紅茶を飲む？」と聞いてくれる、大変きさくな人でした（もっとも、私は遠慮のあまりいつも"No, thank you"と答えていたのですが）。

友人とのティータイム（ダラムにて）

面談は毎回一時間ほど、読んでいる本や書いたものについて、自由に意見を交換します。窓が大きく、イングリッシュガーデンに面した彼女のオフィスで、文学についてじっくり語らった時間は、今振り返ればどとても貴重なものでした。この時に経験した、「先生と学生が対等に、自由に作品について語り合える関係」が、いつしか私にとっての理想形となっており、そんな教員になることを目指して日々試行錯誤しています。

生活面では、一年目は寮に入り、二年目以降は留学生仲間とハウスシェアをして、世界各国の友だちが出来ました。母国について、勉学について、人生について等々、時には夜遅くまで語り合ったことも、忘れられない思い出です。卒業後ダラムを離れ世界各地で活躍する彼らとは今でも連絡を取り合い、刺激を受けています。イギリス人ホストファミリーとの交流も続いています。今では八〇代に近い地元育ちのご夫婦から、大学の中では触れることの出来ない家族の在り方や、生活習慣を学びました。

さて私の専門はイギリス小説ですが、中でも小説と視覚文化の関係や、「見ること」が作品のなかで持つ意味に関心があります。一九世紀半ば頃から、写真技術や映画などの相次ぐ発明によって、人間の「見る」という行為は劇的に変わりました。こうした変化が作品中にどのように描かれているか、ということに関心があります。また、「目は口ほどにものを言う」「目は心の窓」などと言われるように、「見る」という行為は、単なる知覚であることを越え、人間の心情と深く関わるもので、それを分析することに興味は尽きません。

最後になりますが、共立には短期から長期まで、様々な留学制度が整っています。大学の国際化ということがしきりと言われる今、海外経験のある人材を求める企業側からの声も多く聞かれます。留学に少しでも関心のある皆さんには、思い切って実現への第一歩を踏み出してもらいたいと思います。自分自身の経験を振り返っても、留学は人生のかけがえのない財産として、今の私を形作ってくれていると思います。

文芸教養研究室

奥（おく）　彩子（あやこ）　先生

（専任講師）

奥先生は共立にいらっしゃる前は海外の大学で研究員をなさっており、昨年四月に文芸学部に着任なさいました。ご専門は東欧地域文化研究。

今年度は「基礎・文芸ゼミナール」「文芸学演習ⅠC・ⅡC」「文芸学各論C」「現代文化論B」「卒業論文ゼミナール」をご担当になっています。「現代文化論B」では、色々な国の作品が扱われるので楽しみにしている学生も多いのではないでしょうか。「多くの本に触れて、自分の世界を広げてほしい」という先生のお考えは、今年度から文芸教養コース二、三年生を中心にスタートした文教コース特別プログラム〝ブックマラソン〟にも通じています。「研究室にリストにある本を揃えていくので、借りに来てね」とのこと。他コース学生でも気になる方は文芸教養研究室でリストをもらえるようです。

それでは奥先生にご研究のきっかけについて伺いました。（原）

＊＊＊

東欧文学とくにユーゴスラヴィアの文学を専門としています。日本でも現地でも、なぜ？とよく聞かれます。日本人でユーゴ文学を専門とするのは私が三人目だそうで、約二〇年に一人いるかいないかの変わり者なのだそうです。きっかけは高校生のころに起きたユーゴ内戦でした。同じ言葉を話し、仲良く暮らしていた人々が、敵と味方に分かれ、殺し合いを始める。それも、二〇世紀末のヨーロッパで、すでに過去のものと思われていた残虐な殺し合いを。世界中のメディアが、野蛮な国として報道するなか、私が興味を持ったのは「なぜ殺し合いをするのか」でも「なぜ統一国家が崩壊したのか」でもなく、「なぜ一つの国でいられたのか」でした。異なる歴史、文化、宗教をもつ人々が一つの国を形成していたことのほうが、扇情的に書きたてられる殺し合いよりも、稀な事態に思えたのです。

少し説明しておきますと、ユーゴスラヴィアは「七つの国境、六つの共和国、五つの民族、四つの言語、三つの宗教、二つの文字、一つの国家」と言われるほど多様性に富む国家でした。九〇年代の紛争を経て、現在は七つの国に分かれています。この地域を旅行してみると、ローマ時代の建築が残る町や、ヴェネツィア公国時代を感じさせる町、さらにはモスクのある町と、文化的多様性を肌身で感じることができます。

オフリド（マケドニア）にて

ところで、ユーゴスラヴィアに関心をもったからと言っても、「文学」に興味をもつとは限りません。実際、社会主義時代には経済学に関心をもつ人が多かったですし、紛争期には歴史学や政治学が着目されました。文学はなぜか「役に立たないもの」と考えられていて、個人の道楽などと言われることもあります。

確かに、手に職がつくような「実学」ではありません。私自身、大学に入るころは、UNHCR（国連難民高等弁務官事務所）かNGOに入って、国際協力に携わりたいと思っていました。ただ、「血みどろ」を強調する報道や、もっぱら対立に着目する研究への違和感はあり、もう少し遠回りのアプローチをしたいと考えていました。

ある国を理解するためには、今現在起こっていることを知るだけでは十分ではありません。どういう歴史を経て、どういう文化を守っている人々なのかを知らなくては。そういうわけで文学を読みはじめました。するとすぐに彼らはメディアで言われているような「野蛮」な人々ではないということがわかりました。文学という言葉の芸術は、偏見で曇った目を晴らしてくれる、「実際に役立つ」ものでもあったのです。文学は、偏見に抗する力をもつことを知ったとき、文学研究に携わろうと思いました。

学生の皆さんにもたくさんの本を読んでもらいたいですね。

研究ノート

『エミール』の取説（とりせつ）
―取説は私信で―

林　幹夫

ルソーの書簡集といえば、かつて一九二七年のT・デュフール校訂版全二十巻ものが定番であった。これは一九六〇年代の終りに大学生になった筆者も、下宿の大家さんにしてルソーやらサン・テグジュペリやらの作品を翻訳、研究しておられた某大学フランス語教授N先生からお借りして捲ってみたりしていた。

ルソーにはその後これとは別に、R・A・レー監修の完全書簡集がある。各巻の平均頁数が三五〇頁を超えるものが全部で五一巻。ルソーが差し出したもの、ルソーに届いたものを中心に、日付の順に整然と並べられ、通し番号が付けられている。死の年、一七七八年、ルソーが妻テレーズに宛てた五月二三日付けの最後の手紙が七一六七番。怪物級の書簡集といって大袈裟でない。一九六五年、ジュネーヴのヴォルテール協会博物館を出版元として刊行が開始されてから、途中国境を越え、版元を変えながら、実に足かけ三四年の長年月を費やし、一九九八年に完結した代物である。

『エミール』は教育論である。副題に「または教育について」とあるからには、そうなのだろう。けれども実際に繙いてみると、一筋縄ではいかない、読むのに骨の折れる、それは厄介な「教育論」である。呉々も気を抜かれることなく読み進められたい。努々「自然の歩みに従う〈消極的〉教育」論などといって納得することなどないように。

間違ったことをするはずのない創造主が創造したものであるがゆえに本来善なるものとしてこの世に生まれるひとが、いつ、どこから、どうやって邪な人間になっていくのか。「心の歴史」を遡り、悪の入口を突き止め、それを厳重に封鎖することで、創造主の手を出たばかりの善なる「自然人」が、やがて「理性的人間」となり、ついには「有徳人」への途を極めていく、その有様を思考実験してみせる、そこにルソーに独自の人間学即教育学が成立せられるのである。少年エミールを主人公として、その生い立ちを筋として話が展開する、形は小説である。そこで繰り広げられることがらのすべてにルソーは問題としての教育をみる。もとより『エミール』は「教育論」である。

友人クラメールからルソーに届いた一七六四年十月九日付の手紙（R・A・レー版「書簡」三五五二）。

「もし私に息子がおりましても、貴方のおっしゃるエミールにはいたしません。というよりも、貴方のおっしゃることはすべてできないことばかりではありませんか。」

これに応じたルソーのクラメールに宛てた一七六四年十月十三日付の手紙（同三五六四）。

「貴方が《エミール》を真正の教育論と見做されるとは考えてもみませんでした。この本は、著者がその他の著作の中で展開しております、ひとは自然本性的に善であるという原理に関するものであるのです。そこ《エミール》にものしたものなのです」と。

『エミール』は教育のマニュアルなどではまったくないし、これに教育現場の諸問題を具体的に解決づける処方箋を期待して応えられるべくもない。著者自身がいうよう『エミール』は教育の原理のそのまた原理の書である。取扱いには呉々もご注意を！

―ルソー生誕三〇〇年の年に。

（はやし　みきお　教授・教育学）

心象点描

萌え・・・

鈴木　国男

ふと心の中を覗き込んだ時に現れるイメージ、それを心象というのだろうか。そんなことを思ってみたら、「男前の娘役」の姿が浮かんできた。四月に退団した元宝塚歌劇団月組娘役トップスター、蒼乃夕妃である。

キレのあるダンスと、意志の強い芯の通った人物を鮮やかに見せる演技力、男に寄り添うタイプのヒロインとは異なる個性ながら、包容力のあるトップ霧矢大夢との相性は抜群だった。

サヨナラ公演となった、「王冠を賭けた恋」をもとにした『エドワード8世』とショー『Misty Station』の各場面は、今でも脳裏に焼き付いて離れない。当分、私の心象風景はこれ一色になりそうだ。

娘役なのに男前、いやそれ以前に女性が演じる理想の男性像など、宝塚歌劇は不思議の世界と言われて久しい。そして男性ファンがごく少ないのだろう。

設立当初は可憐な少女たちの舞台として家族揃って楽しめる健全な娯楽であり、阪神間の少年たちが胸をときめかせたという。遠藤周作や手塚治虫もファンだった。それが、戦争に向かう時代に軟弱とされ女性だけのコミュニティに隔離されてしまった影響は、やはり大きいと言わざるをえない。

戦後になってもそれが変わらなかったのは、日本人の心性の根本が、結局もとには戻らなかったことの証であるとも受け取れる。「ますらおぶり」「たおやめぶり」双方があっての日本文化のはずだったのに、「武士道」よりも「もののあわれ」の方が、はるかに長く深い伝統だったのに、などと両外漢が呟いても詮無いのかもしれないが、「戦士」だったりオスカルだったりするのは、まだ希望の光だと思いたい。

だから、宝塚歌劇を創ったのが、明治に生まれ二十世紀前半のトップリーダーの一人だった小林一三という人物であり、その劇団がそんな時代を乗り越え、まもなく百年の歴史を刻もうとしていることも、奇跡のように思え、限りなく愛しく感じるのだ。

日本の近代を振り返れば、明治維新の英雄たちは、避けられたかもしれない内戦を敢行して多くの同胞の血を流し、富国強兵を掲げて戦争と海外進出を繰り返した。教育もジャーナリズムも概ねそれに追随した。それが失敗に帰すと、今度はひたすら経済成長を追い求め、その支えとして命を惜しまず電力を生産してきたのである。歌劇が滅びる時に、そんな時代が完成するのであろう。それまで生きていたくはないから、それ以後を生きる女性たちのために命を削りたい・・・。

とは思うのだが、今このときの快楽に身を委ねたいという煩悩も断ち切れない。かつてタカラジェンヌは素敵なお姉さまたちだった。麻実れい、大地真央、峰さおり、平みちといった煌く男役スターの数々。こだま愛も今思えば男前の娘役だった。春日野八千代亡き後も轟悠が健在なのは心強いが、世代的にいって「憧れ」を抱けたのはどうやらきりやんが最後らしい。

今は・・・？正直にいうと、いわゆる「萌え」という感情がこれかしらん、と感じたのは、蒼乃夕妃を見ていた時だった。これからはさきちゃんかなあ・・・嗚呼。

（すずき　くにお　教授・イタリア演劇）

須田基揮　画

※通常は4面掲載の「プロフィール」を、今号では2・3面で特集しています。

フィルムの窓

〈日本語日本文学〉
うるうるうろうろ

日文研究室は本館一四階、一四二研究室です。入口を入ると、二人の助手さんが迎えてくれます。手前が須藤さん、奥が咲本さんです。「看板娘」というほどではありませんが、学習指導だけでなく、大学生活全般について、みなさんと教員の間に立って支えてくれる頼もしい存在です。

去年の卒業式、日文の学生を前にみんなでお祝いの挨拶をしました。教員に続いて助手さんが挨拶を始めました。と思う間もなく、須藤さんが、涙で声をつまらせて話せなくなってしまいました。つられて卒業生も、そして数人の教員も貰い泣きしてしまいました。その次の咲本さんもうるうるして…。そうか、厳しく指導しているときもあるけれど、こんなに学生のことを思っていたんだな、と改めて感じました。

そういえば、十二月十八日の卒論提出期限の日、二人は朝から落ち着きません。学生本人よりもうろたえています。出来上がった卒論の製本を手伝ってくれたり、提出のための事務的なことを確認してくれたり。毎年一人二人は必ずいるのですね、電車が遅れたとか言って時間ぎりぎりに電話をかけてくる学生が。去年は、須藤さんがその電話を受けました。「どこにいるのっ！」ふだんはおっとりした須藤さんの強烈な一言が研究室に響き渡り、私たちは一瞬凍りつきました。そのあと、須藤さんは、居ても立ってもいられず、ロビーに降りて、外にまで出て、うろうろしていました。

もうすぐ卒論提出ですね。今年はあまり心配をかけず、うろうろさせたくないと思いますが、それはみなさん次第です。

最後に、須藤さんはパンが大好き。ヨックモックのロールケーキが大好物です。咲本さんはじゃがりこが大好物です。

（遠藤）

〈英語英米文学〉
なぜ言葉を学ぶのか

英語英米文学コースは、専任教員五人と助手二人が所属しています。みなさんは日頃の授業で多くの教員と接しているでしょうが、もしかしたら、まだ一度も授業を受けたことがない専任教員もいるかもしれません。大学の授業は多くの非常勤の先生に支えられている面も大いにありますが、専任教員は授業だけではなく、みなさんの大学生活が豊かになるように様々な企画――Reading Marathon や卒業生の話を聞く会、卒論報告会を催しています。

文芸学部では卒業論文・卒業制作を四年間の学習の集大成として位置づけています。二年生になって英語英米文学コースに居場所を獲得したみなさんの多くは、「英語」を読み、話し、聞き、書くようになれることを自分の学習目標として設定しているでしょう。とても大切なことです。「始めに言葉ありき」と言われているように、私たちはコミュニケーションをとるために、言葉を多く使います。まず、言葉を学ぼうとするのは、同じ言語を使う人間だけではなく、異なる言語を使う人々とのコミュニケーションには不可欠だからです。

しかし、もう一度考えてみましょう。私たちは何のために言葉を学び、コミュニケーションをとろうとするのでしょうか？それは、自分自身や自国の文化を、他者に理解してほしいからではないでしょうか？　自分以外の誰かを理解し、自国以外の文化を理解したいと思うからではないでしょうか？　文学は文化を知るための手がかりの宝庫です。

コースはみなさんのホームグラウンドです。私たちのコースでは、英語を通して自分を知り自国を知り、他者を知り他国を知るための場所でありたいと思っています。それが、みなさんの可能性を拓くものでありますように！

（沼田）

〈フランス語フランス文学〉
マイペース

あなたはのんびりさん？それともせっかちさん？

○のんびりさんへ

ゆったりと落ち着いた気持ち、素敵なことです。でも、後々に慌てることのないよう、気を付けていますか？

たとえば、提出物。毎回、締切り直前に泣きそうな気持ちで仕上げているみなさん！　ご自身で締切りを一日早く設定してみましょう。これで締切り前日の「あと一日あればなぁ」が解消されるはず。この作戦のコツは「本当の締切りは翌日」という気持ちを捨てることです。

卒業論文の提出を来月に控えた四年生のみなさん。こちらも締切り間近になって「あと一か月あればなぁ」と思うかもしれません。今ならまだ「あと一か月」以上あります！　今のうちから計画的に進めましょう。

○せっかちさんへ

テキパキとした早めの行動、よい習慣です。でも、速さを気にしすぎて見落としていることはありませんか？

たとえば、読書。速読で話の流れを追うだけでなく、言葉そのものを味わいながら丁寧に読むのもとても楽しいことです。

何事も自分にプレッシャーをかけすぎずに、たまには立ち止まってひと呼吸してみましょう。

○みなさんへ

とはいえ、のんびりもせっかちもきっと、あなたらしいペース。油断しすぎず、かといって焦りすぎず、自分らしく進んでゆきましょう。

さて、話は変わって、ただいま温めている企画についてお知らせします。

他コースで今年の春に始まったブックマラソン（読書記録のようなもの。名称はコースによって異なります）を、仏文コースでも始めます！　詳細は年度末のガイダンスでお知らせしますので、お楽しみに。

・・・のんびりしがちな私ですので、少々早めにお知らせしてみました。ちょっとせっかちすぎたかしら。

（石崎）

〈劇芸術〉
かばんの居場所

今年の授業が始まってしばらくしてから教室内のある光景が妙に気になりはじめた。授業時に机の上にかばんを置いたままでいる学生が結構いるのだ。

教室定員ぎりぎりの受講者数だったりして置き場に困っているからではなさそうだ。長机の横にも隣の椅子にも置けるのに、目の前に大きなかばんをデーンとおいて狭いスペースで熱心にノートを取る姿も目撃した。マナーの善し悪し以前に、なぜ大きなかばんを目の前に置いておくのか？　その理由がさっぱり分からなかった私は、かばん置く派の学生に直接きいてみることにした。

まず「日本演劇史概論」で三人、次に「劇芸術概論」で一人、「卒論ゼミ」四人、「劇芸術演習ⅡB」ではいなかったが、受講者から様々な意見が出た。

＊必要なものをすぐに取り出せるから

＊床におくとかばんが汚れるから（絶対にいや）

＊通路におくと邪魔だから

＊なんとなく。気づかずに置いている。

分かるものもあれば分からないものもある。みなさんはどう思うだろうか？　反対に床に置いたかばんを机の上に置いて欲しくない、という意見や就職活動ではマナー違反である、防犯上かもしれない、という声もあった。

授業をする側からするとやはりかばんは机の上からどかしてほしい。なぜか？　正直に言おう。授業をしている私が目の前にいる、という状況がないがしろにされているように感じるからだ。面白い芝居を成立させるためには観客の力も重要である。老婆心ながら（四十代ですけど）授業時に限らず、「人」と向き合う時のふるまいについてはもう少し気を配ってもいいのではないかと思っている。

（阿部）

〈造形芸術〉
卒業生たち

学内で時折、卒業生の姿を見かける。おや？と思って声をかけると、「今日は会社が休みなので」とか「午後、時間が空いたので」など、なんとなく来ましたということらしい。研究室まで訪ねてくれることもあるし、その他にも一階ロビー（友人と待ち合わせ）、各階ラウンジ（まったりしに来た）、そして図書館でよく遭遇する。卒業して数年の間は、在学生とあまり見分けがつかず、大学の風景にもしっくりなじんでいる。そうやって足を運んでくれるということは、きっと在学中に、この場所で良い時間を過ごしていたのだろうと思うと、教員としては素直に嬉しい。仕事の話、恋愛の話、時には愚痴など、彼女たちが学生であった時にはできなかった「大人の話」で盛り上がって、その成長ぶりを実感できるのもこの上なく楽しい。

その反面、卒業後の居場所を、社会の中にちゃんと確保できているのかしら？と心配にもなる。ただしそれも杞憂で、そうやって頻繁に顔を見せてくれるのも、しばらくのこと。彼女たちが自分自身の人生を懸命に過ごしているうちに、大学という場所は確実に「過去」の領域におさまってゆく。

大学は、社会に船出する準備のための、ひと時の通過点ではあるけれど、その後の人生の喜びも困難も、全ての起点となる。時折顔を見せる、若い卒業生たちは、人生の移行期間のはざまで、しばし舵を取る手を休めに来ているのかもしれない。在学生の皆さんにも、今いる場所で、素晴らしい時間を過ごして欲しいと心から願っている。良い思い出を満載して、ここから船出してもらいたい。そして、風待ちの日には、気軽に母校に寄港すると良い。母校＝母港と、そういえば読みが通じる。

（山本）

〈文芸教養〉
ブックマラソン

江碧鳥逾白、山青花欲燃（江碧にして鳥逾白く、山青くして花燃えんと欲す）という季節を迎えた今年の四月、文芸教養コースでは新しい企画をはじめました。それが特別プログラム「ブックマラソン」です。

「ブックマラソン」の目的は言うまでもなく、学生に多くの本を読んでもらうことで知識を豊かにし、視野を広げてもらうことにあります。いまの時代、書物は私たちにとって、食べ物、水と同じようにますます欠くことのできない存在になったと言っても過言ではありません。さまざまな本が次々と出版され、世の中には素晴らしい本が溢れています。その一方で読書はしたいのに、どんな本を読めばいいのか分からない学生もけっして少なくありません。そこで私たち文芸教養コースの教員はいまの学生に適した本を百冊選んでそれを推薦図書リストにしました。そのうち、★のついている本は教員が特にお勧めしているものです。その一部は文芸教養コース一四二〇研究室に置いてあります。

一四二〇研究室に入ると目を奪われるのが、本棚に並んでいる本です。『傾城の恋』や『魔女』や『忠臣蔵』などのタイトルを目にすると思わず手に取って読みたくなります。これらの本は自由に借りることができ、四月からすでに四十何回も貸し出されています。そして読書の楽しさを味わった学生たちは用意されたお洒落なノートにレビューを書いたり、感動した箇所を引用したりしています。

この「ブックマラソン」にみなさんにぜひ参加してほしいと思います。多くの本を読んで青春時代を充実させましょう。そしてこのプログラムを通して自分の人生を変えるような本に出会うことを大いに期待しています。

（曹）

〈文芸メディア〉
苦労は自分のため

文芸学部では一年間の履修単位数が四十二に制限されています。この制限いっぱいに履修登録すると、だいたい一週間に十程度の授業になると思います。

一週間に十の授業を履修するということは十個の仕事を並行して進めているのと同じことです。考えてみればこれはスゴいことです。十の仕事を抱えているビジネスマンは目の回るような忙しさで寝る時間を削って働いていることでしょう。大企業の社長さんなら十をはるかに超える仕事に携わっていると思いますが、彼らには部下がいます。一方、学生には部下はいません（ま、パソコン君や図書館君をうまく活用すれば有能な部下になり得ますが）。

「仕事」が並行しないようにするには、たとえば、月火水の朝から晩までひとつの授業を履修し、木金土でまたひとつの授業を履修する、という「短期集中型」が考えられます。三日間はその授業のことだけ考えていればよいのです。しかし、授業の重なりが多くなり時間割の自由度が下がってしまいます。現実的ではありません。

また、絶え間なく同一の授業を受けるだけでなく「考える時間」が必要でしょう。予習復習したり、授業の内容を思い出しながら自分なりの考えをまとめたり、他の授業の内容とのつながりを考えたり、関連書籍を読んだりすることによって脳味噌の中身が豊かになっていくわけです。少々大変ですが、このような思索や行動が良い卒業論文につながります（ホントだよ、みんなやってる？）。

というわけで、やっぱり一週間に一回の開講形態がよいみたいですね。

なんだかまとまりのない話になりましたが、学生の皆さんは苦労をしてください。苦労の経験はきっといつか活きます。

（藤田）

〈教職課程〉
実践演習とカルテ

教職課程の必修科目として、平成一〇年度入学生から適用されてきた「教職総合演習」は現在の四年生を最後に閉じられ、平成二二年度入学生すなわち来年度の四年生からはそれに代わって、新たに「教職実践演習」が必修科目となります。

教職実践演習は、他の教職課程科目の履修や、教職課程外での様々な活動を通じて身に付けた資質能力が、教員として最小限必要な資質能力として有機的に統合され、形成されたかについて、大学が自らの養成する教員像や到達目標等に照らして最終的に確認するための、いわば四年間を通じた学びの集大成です。

そこでは、将来教員になる自分にとっての課題を自覚し、知識や技能等の不足を補い、それらの定着を図ることで、教職生活が円滑にスタートすることが期待されており、「履修カルテ」は、自らの学びを振り返りながら、教師としての実践力を養う、そのための、教職科目の履修やボランティアなど社会体験の履修歴の掛け替えのない記録です。

（葉椰子）

〈司書課程〉
カリキュラム改正の注意点

今年度入学生から司書課程は新カリキュラムに移行します。現在履修中の二年生から四年生は旧カリキュラムで履修しますが、履修年度によって読み替えの必要が生じます。

新カリの大きな変更点は、「資料組織論Ⅰ」「資料組織論Ⅱ」を廃止し、これらを含わせた内容の「情報資源組織論」を新設したことです。来年度から、新旧科目が並行して開講されます。

旧カリ履修者のために「資料組織論Ⅰ」は平成二五年度まで、「資料組織論Ⅱ」は平成二四年度までは当然開講しなければなりません。両科目ともそれ以降は再履修者向けの科目となりいつまで開講するか未定なので、確実に単位を取ることを心掛けて下さい。

また新カリでの履修が定められている今年度の編入生・科目等履修生は、移行期の特例として、「情報資源組織論演習A・B」（それぞれ「資料組織論Ⅰ演習」「同Ⅱ演習」と対応）からの履修が認められます。

（下村）

～ひと言ふた言～
カツッ！

「就活」やら「婚活」やら、やたら「カツ」の付くことばが流行っています。中には「終活」（人生の終わり方）なんてのまであるそうな。トホホ。

これらに対して、大学の進学や卒業に関する「カツ」というのは聞いたことがありません。今の日本では、大学に進むのは当たり前という空気ですし、就職のために、あえて卒業しないという学生もいるくらいです。特別に活動する必要なんてないからかもしれません。でも、本当にそうなのでしょうか。

とりわけ不況のなか、大学生であること自体がとても恵まれていることに変わりありません。そして、そのアドバンテージは、もちろん就職や結婚のためではありません。これからの長い人生のためです。とくに文芸のような学部では。

その自覚をどれだけ早く持てるか、それに基づいて、どれだけの「ガッカツ」（学生活動）ができるか。これがその後の活動の鍵になります。

折角のアドバンテージをよもやハンディなんかにしないよう、ここでしっかりカツを入れておきましょう。

（半沢）

大学院文芸学研究科情報

大学での学びは、さながら和洋折衷のビュッフェ。対して大学院の学びは、毎日飽きずに食べられる（？）讃岐うどん。噛めば噛むほど味わい深く、コシの強さに惹かれてやまない人多し。

さて、このうどん。煮るのも焼くのもあなた次第！多彩なトッピング（分析）で腕を振るってみませんか？　次年度入学のラストチャンスは来年の二月入試です。

（島）